

高崎市文化財調査報告書第406集

菅谷中西遺跡
住宅造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

菅谷中西遺跡

住宅造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018.3

高崎市教育委員会
株式会社阿久津土地開発
スナガ環境測設株式会社

高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書第406集

菅谷中西遺跡

住宅造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書





2018.3

高崎市教育委員会
株式会社阿久津土地開発
スナガ環境測設株式会社

例 言

- 1 本書は、住宅造成に伴う「菅谷中西遺跡」（高崎市遺跡番号719）の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地 群馬県高崎市菅谷町字中西1280番地1外。
- 3 発掘調査および整理作業は、高崎市教育委員会（教育長 飯野 眞幸）の指導のもとに、事業者 株式会社阿久津土地開発（代表取締役 阿久津 昇）の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（代表取締役 須永 眞弘）が実施した。
業務監督員 矢島 浩（高崎市教育委員会）
調査担当者 板垣 宏（スナガ環境測設株式会社）
- 4 発掘調査から整理作業を経て本書刊行に至る経費は、株式会社阿久津土地開発に負担して頂いた。
- 5 発掘調査期間 平成29年11月11日～平成29年12月26日
整理期間 平成29年12月27日～平成30年3月30日
- 6 調査面積 433㎡
- 7 本書の執筆は、Iを矢島、それ以外を板垣が行った。
- 8 空中写真撮影は、有限会社K E L E Kにお願いした。
- 9 出土遺物および遺構図面・写真などの調査記録類は、すべて高崎市教育委員会が保管する。
- 10 発掘作業・整理作業に参加した方々（敬称略・順不同）
[発掘作業] 長沢俊夫 菊川 毅 芳川孝夫 西谷徳雄 小池岩男 田辺晴彦 内田昭男 内山朋子
設楽 高 橋本新一 黒崎増次 [測量・整理作業] 松井直人 山口慶太 星野陽子
- 11 発掘調査・整理作業では多くの方々にご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。
菅谷町自治会 滝の宮神社氏子代表

凡 例

- 1 本書で使用した北方位は座標北を表し、座標は世界測地系第IX系を用いている。
- 2 掲載した実測図の縮尺は、すべて挿図中に示したが、次のとおりである。
遺跡全体図は1/300、個別の遺構平面図は1/60、遺構断面図は1/60である。
- 3 本書で使用した地図は、国土地理院発行1/200,000地勢図「宇都宮」・「長野」と1/25,000地形図「前橋」「高崎」、高崎市発行1/2,500都市計画基本図である。
- 4 土層断面の土色名及び土器類の色調名は、『新版標準土色帖』（農林省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修）による。
- 5 本書で使用したテフラ（火山噴出物）の呼称は、次のとおりである。
As-A（浅間A軽石：天明三年，1783年） As-B（浅間B軽石：天仁元年，1108年）
Hr-F P（榛名ニッ岳伊香保テフラ：6世紀中葉） Hr-F A（榛名ニッ岳渋川テフラ：6世紀初頭）
As-C（浅間C軽石：3世紀末～4世紀初頭）
- 6 遺構・遺物実測図中のスクリーントーンは下記のとおりである。
遺構断面図 地山・・・  Hr-F A・・・ 
遺物実測図 須恵器断面・・・  施釉陶器表面・・・ 

目 次

例言 凡例 目次

I 調査に至る経緯	1
II 地理・歴史的環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 調査の方法と経過	
1 調査の方法	4
2 調査の経過	6
IV 基本層序	6
V 検出された遺構と遺物	
1 調査概要	8
2 溝跡	8
3 土坑	11
4 ピット	11
5 遺構外の遺物	13
VI まとめ	14

挿 図

第1図 調査区位置図	1	第7図 1・2・4号溝跡遺構図(1)	9
第2図 遺跡位置図	3	第8図 1・2・4号溝跡遺構図(2)	10
第3図 周辺遺跡図	5	第9図 1・2号土坑遺構図	12
第4図 基本層序	6	第10図 1～4号ピット遺構図	12
第5図 調査区全体図	7	第11図 遺物実測図(2)	13
第6図 遺物実測図(1)	8	第12図 菅谷城址平面図	15

表

第1表 遺物観察表(1)	8	第2表 遺物観察表(2)	13
--------------	---	--------------	----

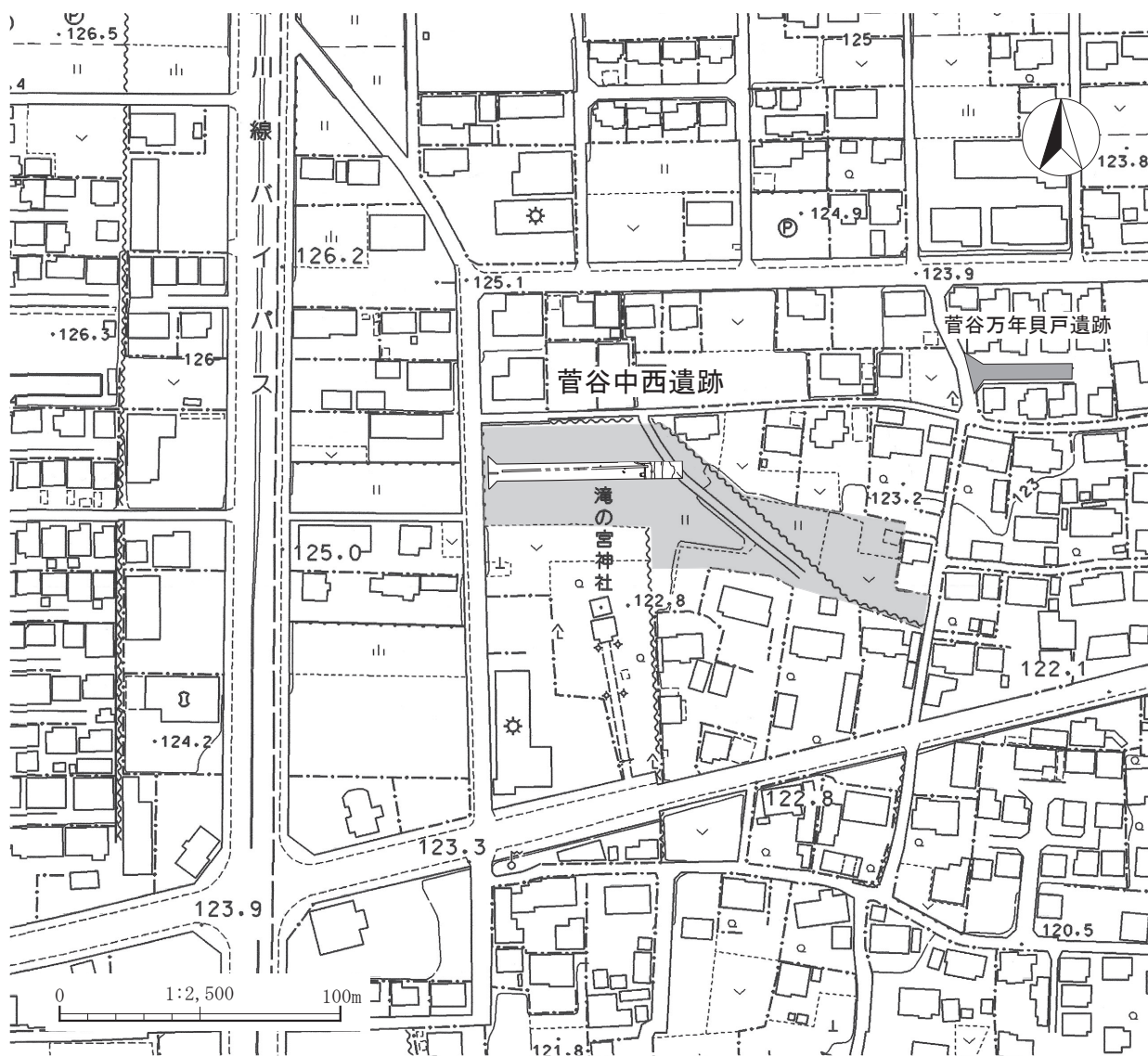
写真図版

PL.1 調査区遠景、調査区全景	PL.3 1・2・4号溝跡全景、1・2号土坑 全景、1～3号ピット全景
PL.2 調査区遠景、調査前全景、作業風景 基本土層1～4	PL.4 4号ピット全景、埋没谷全景、出土遺物

I 調査に至る経緯

平成29年8月、土地所有者福田充雄氏と株式会社阿久津土地開発から、高崎市菅谷町において計画している宅地造成に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課(以下、市教委と略)にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である菅谷遺跡群に隣接し、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。開発計画が具体化した同年8月2日には、市教委へ埋蔵文化財試掘(確認)調査依頼書と文化財保護法に基づく届出が提出され、同年9月12日・13日に試掘(確認)調査を実施した。その結果、中世の溝と土坑が確認され、埋蔵文化財の所在が明らかになった。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお、遺跡名については「菅谷中西遺跡」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」に順じ、平成29年10月23日に株式会社阿久津土地開発・民間調査機関スナガ環境測設株式会社・市教委との間で三者協定を締結、また11月6日に株式会社阿久津土地開発とスナガ環境測設株式会社との間で契約を締結した。調査の実施にあたって市教委が指導・監督することとなった。



第1図 調査区位置図

II 地理・歴史的環境

1 地理的環境

菅谷中西遺跡は、群馬県の中央部に位置する高崎市菅谷町に所在する。本遺跡は関東平野の北西端部、赤城山、妙義山と上毛三山の一つである榛名山の東南麓の末端、井野川の支流天王川左岸に立地する。標高はおよそ124.00mである。

榛名山東南麓は、その地形を見ると扇状地が発達していることが解る。本遺跡はこの扇状地の扇端に立地している。この扇状地は「相馬ヶ原扇状地」と呼ばれ、火山山麓に形成された裾野扇状地で、形成にかかわった河川は榛名山麓に源流を発する榛名白川と午王頭川である。扇頂は標高600m付近で、扇端は標高110m付近である。扇状地内は多くの河川により浸食されているが、のちの土石流で埋没しているものもある。その一つが本遺跡から検出された埋没谷で、その他にも多くの河川が存在していたことが推定される。また、遺跡地の南部や天王川の左岸には小規模な古墳に見える泥流丘が存在している。これらの泥流丘は「菅谷泥流丘」と呼ばれ、相馬ヶ原扇状地の古期扇状地形成期の堆積物と考えられている。

2 歴史的環境

縄文時代

菅谷中西遺跡(以下本遺跡)では中期後半の加曾利E式土器が1点出土しているだけで、遺構は確認されていない。周辺遺跡でも、遺物はほとんどの遺跡で出土するが、遺構確認例は少ない状況にある。上野国分僧寺・尼寺中間地域(26)で、前期後半の住居跡1軒と中期後半の住居跡のべ30軒以上の住居が確認された。小八木志志貝戸遺跡(11)では後期初頭の柄鏡形住居、鳥羽遺跡(34)では晩期の住居が確認されている。

弥生時代

前期～中期前半の資料は少なく、小池遺跡(20)や西三社免遺跡(21)で少量の遺物が確認されている。中期後半頃から資料が増加し、後期では、さらに遺跡数が増加し、水田や墓域の検出も顕著となる。史跡日高遺跡(37)は後期における拠点の集落として代表的な存在である。この他、後期の集落として諸口遺跡群(12)、正観寺遺跡群(9)、小八木志志貝戸遺跡(11)等があり、水田は小八木遺跡群(41)がある。

古墳時代

集落は弥生時代以上に増加の傾向がみられる。特に5世紀から6世紀にかけての集落の増加には顕著なものが見られる。こうした背景には本遺跡から1.8km西にある三ツ寺遺跡や2.2km北にある北谷遺跡の豪族居館の出現が考えられる。小池遺跡(20)、西三社免遺跡(21)、国分僧寺・尼寺中間地域(26)が前期の集落としてあげられる。中期は小八木志志貝戸遺跡(11)の調査例がある。後期は菅谷遺跡群(4)、棟高遺跡群(18)、国府南部遺跡群(24)、小八木遺跡群(41)等がある。

生産址は、前期初頭頃浅間山の大规模噴火で降下したAs-C軽石や、6世紀初頭とされる榛名山の噴火で形成されたHr-F A層を手がかりに、当時の水田や畠が確認されている。前期の水田跡に菅谷石塚遺跡(16)、畠跡に国分僧寺・尼寺中間地域(26)、稻荷台北金尾遺跡(35)等がある。後期の水田跡に上野国分僧寺・尼寺中間地域(26)、畠跡に棟高遺跡群(18)、小池遺跡(20)、西三社免遺跡(21)、国分僧寺・尼寺中間地域(26)、小八木村前遺跡(39)等がある。

古墳は、本遺跡から2.2km西に、5世紀後半に墳丘長100m前後の前方後円墳3基からなる保渡田古墳群が



第2図 遺跡位置図

築かれる。遺跡周辺では6世紀から7世紀にかけて築かれた菅谷古墳群(7)、正観寺古墳群(10)、諸口古墳群(13)がある。

奈良・平安時代

古代上野国府は、染谷川と牛池川に挟まれた元総社地区に存在が想定されている。周辺には大型掘立柱建物跡を検出した元総社小学校校庭遺跡(33)や墨書土器「国厨」を出土した元総社寺田遺跡(32)があり、想定を裏付ける資料がみられる。国府の北西には、上野国分僧寺(25)および尼寺(27)が建立されている。

本遺跡の南側には東山道(国府ルート)と想定される道跡が、高貝戸遺跡(5)、菅谷遺跡(6)、正観寺遺跡群(9)、西浦南遺跡(14)、福島飛地遺跡(15)で検出されている。

集落は、本遺跡周辺には菅谷万年貝戸遺跡(2)、菅谷村東遺跡(3)がある。また東山道(国府ルート)を挟むように菅谷遺跡群(4)、正観寺遺跡群(9)があり、棟高遺跡群(18)、諏訪西遺跡(19)、小池遺跡(20)、西三社免遺跡(21)でも集落が高密度に検出されている。

生産址は、正観寺西原遺跡(8)、小八木志志貝戸遺跡(11)、菅谷石塚遺跡(16)、小八木葦貝戸遺跡(40)、小八木遺跡群(41)で水田が検出されている。

中世以降

周辺では、12世紀から14世紀の資料は乏しい。浅間山噴火による被災からの復興や「武士団」が台頭する時期と重なるが、不明な点が多い。

室町幕府体制下において、関東管領上杉氏、上野国守護代長尾氏が当地域を実質支配していた。永享元年(1429年)、総社長尾氏は国府内に蒼海城(D)を築城し、県下最初の城下町を形成したと考えられている。その後、古河公方足利公方との対立が主な原因で、関東管領上杉氏、守護代長尾氏は衰退してゆく。一方、長野郷(高崎市浜川町付近)を本拠とし、15世紀に箕輪城を居城とした長野氏が勢力を拡大していく。本遺跡南側一帯に存在が想定される菅谷城(A)は長野氏に関連する城跡と想定されており、浄眼寺は城主の持仏堂と考えられている。周辺におけるその他の中世城館址の調査例としては、金尾城(B)、中尾城(C)があげられる。

太平洋戦争末期の昭和十八年(1943年)、本遺跡の北方一帯を中心として、陸軍前橋飛行場(堤ヶ岡飛行場)の建設がはじまる。その際、調査区南にある滝の宮神社は、700m離れた小字名滝社から現在地へ移転したと『堤ヶ岡村誌』に記されている。本遺跡はかろうじて飛行場の範囲から除外されているが、その痕跡は棟高辻久保遺跡(22)等で調査されている。

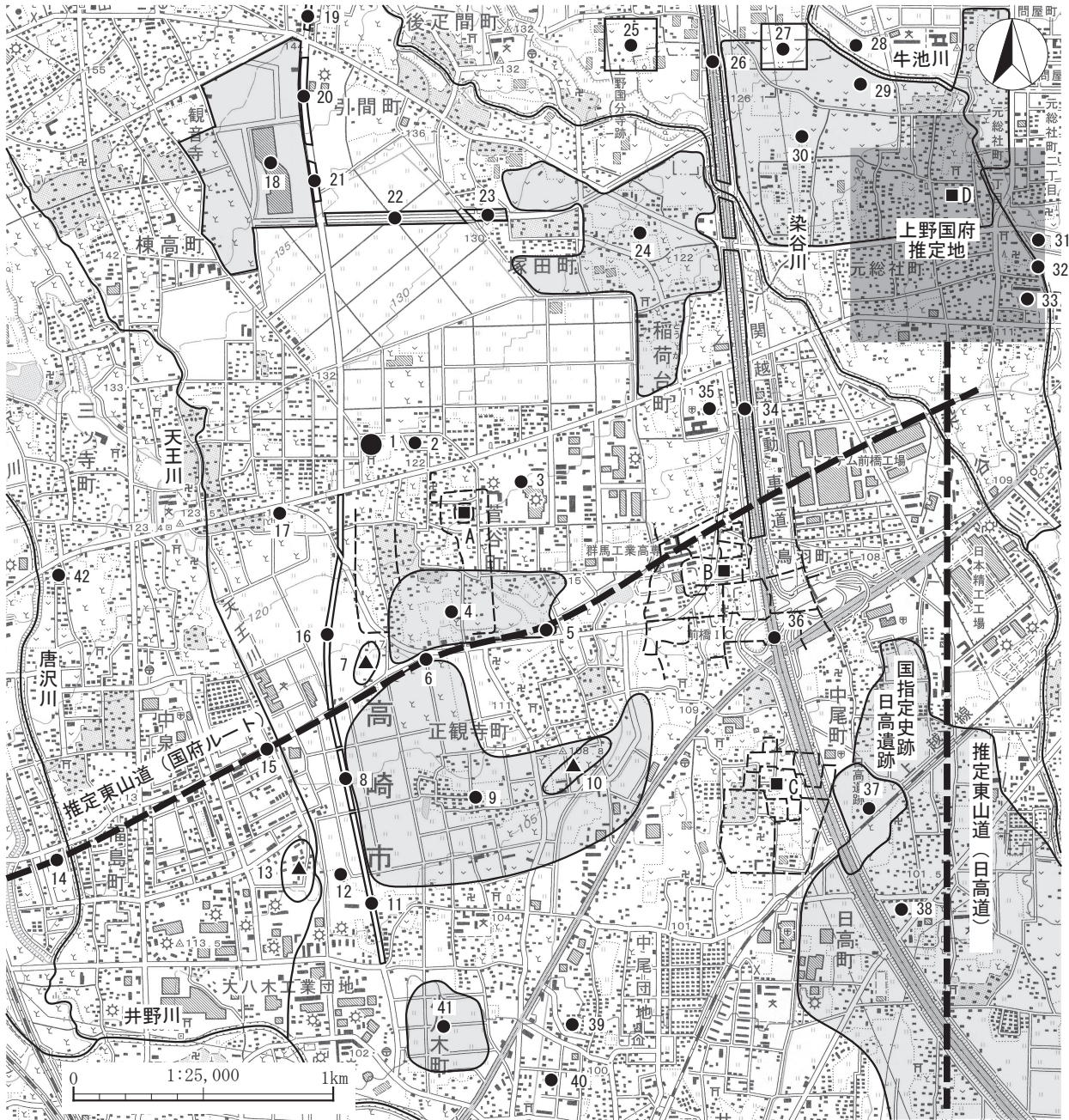
Ⅲ 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査範囲は宅地造成地の幅6mの道路の一部で、直線で69mほどである。現況は畑として利用されていて、北側と西側は一段高いところに現道が走り、周辺は住宅が立ち並んでいる。南側は滝の宮神社に接している。そのため安全対策として安全ネットを北側と西側に設置している。

表土掘削は、バックホウを用いてHr-FA上層まで行い、ジョレン・移植ゴテを使用して遺構の検出にあたった。その際、湧水が激しく、水中ポンプを使用している。結局、水中ポンプは排土埋戻し終了まで24時間体制で稼働させた。

各遺構の調査は、ベルトや壁を観察し、土層の埋没状況や構築状態の把握につとめた。平面図はトータルステーションを用いて測量し、断面図は1/10・20の縮尺で手実測した。



1. 菅谷中西遺跡 (本調査) 2. 菅谷万年貝戸遺跡 3. 菅谷村東遺跡 4. 菅谷遺跡群 8. 正観寺西原遺跡 9. 正観寺遺跡群
 11. 小八木志志貝戸遺跡 12. 諸口遺跡 16. 菅谷石塚遺跡 17. 棟高東弥三郎街道遺跡 18. 棟高遺跡群 19. 諏訪西遺跡
 20. 小池遺跡 21. 西三社免遺跡 22. 棟高辻久保遺跡 23. 引間六石遺跡 24. 国府南部遺跡群 25. 上野国分僧寺
 26. 上野国分僧寺・尼寺中間地域 27. 上野国分尼寺 28. 元総社北川遺跡 29. 元総社小見内Ⅲ遺跡 30. 元総社蒼海遺跡群
 31. 元総社明神遺跡 32. 元総社寺田遺跡 33. 元総社小学校校庭遺跡 34. 鳥羽遺跡 35. 稻荷台北金尾遺跡 36. 中尾遺跡
 37. 史跡日高遺跡 38. 日高遺跡群 39. 小八木村東遺跡 40. 小八木葦貝戸遺跡 41. 小八木遺跡群 42. 三ツ寺村前道下遺跡

▲古墳

7. 菅谷古墳群 10. 正観寺古墳群 13. 諸口古墳群

東山道関連の遺跡

5. 高貝戸遺跡 6. 菅谷遺跡 9. 正観寺遺跡群 14. 西浦南遺跡 15. 福島飛地遺跡

■中世の城跡

- A. 菅谷城 B. 金尾城 C. 中尾城 D. 蒼海城

第3図 周辺遺跡図

写真撮影は、35mmモノクロネガフィルム・カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラの3種類を使用した。空中写真撮影はラジコンヘリコプターを使用した。

2 調査の経過

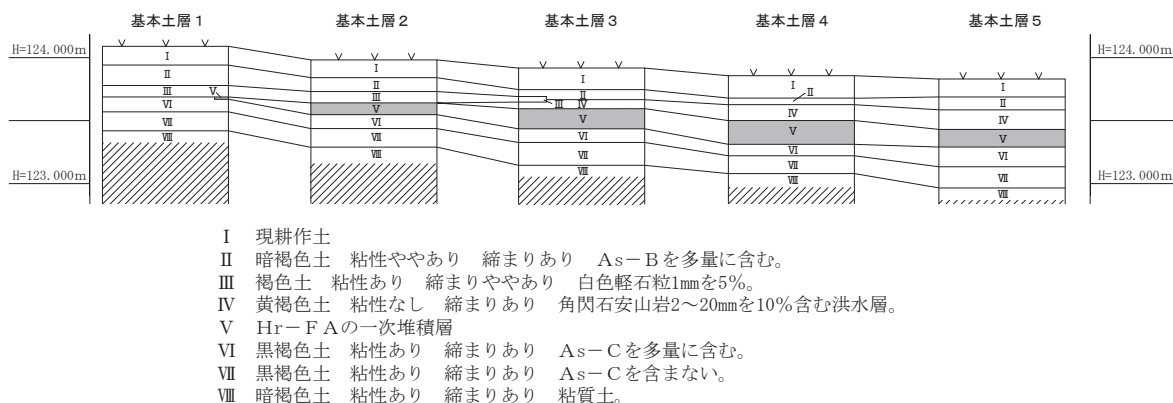
現地での発掘調査は、平成29年11月11日から平成29年12月26日の間で実施した。

11月11日	発掘器材を搬入する。	12月2日	トータルステーションによる平面実測を開始する。
11月13日	遺跡の北側と西側に安全ネットを設置する。 バックホウを搬入する。	12月13日	空中撮影を実施する。高崎市教育委員会による現地調査の終了を確認。
11月14日	調査区の範囲出しを行い、表土掘削を西側から開始する。同時に壁切り、ジョレンによる遺構確認を行う。	12月15日	排土の埋戻しを西側から開始する。
11月16日	湧水対策として水中ポンプを使用する。	12月20日	すべての測量を終了する。
11月17日	表土掘削終了後、排土の養生を行う。	12月22日	埋没谷と大溝の埋戻しに砕石を投入する。
11月29日	基準点測量・水準測量を行う。	12月26日	埋戻し作業を終了する。発掘器材を搬出し、すべての作業を終了する。
12月1日	移植ゴテによる精査を開始する。		

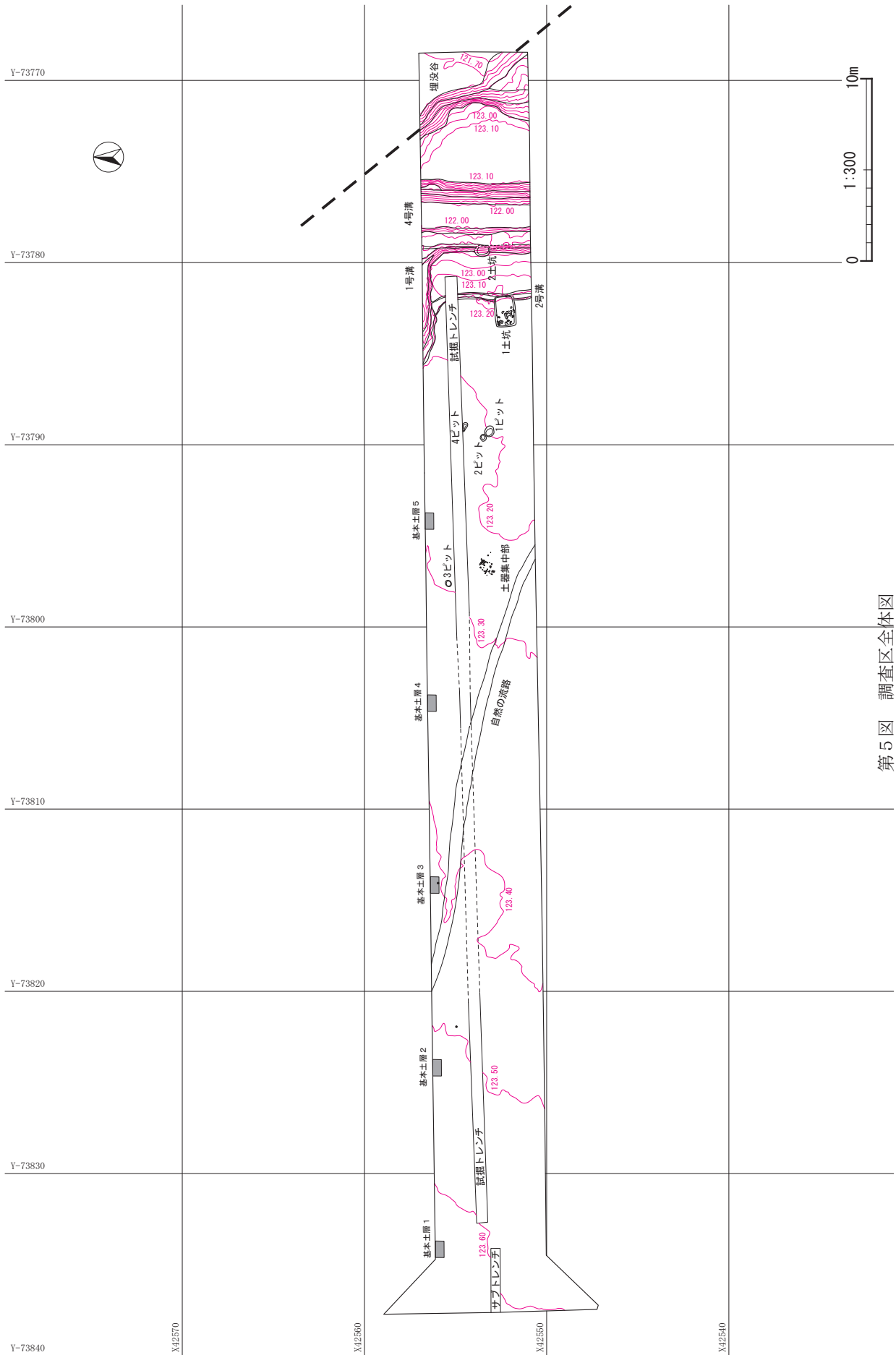
IV 基本層序

深掘トレンチを10m毎に5ヶ所設け、基本土層の観察をおこなった。埋没谷は、南壁で土層観察をおこなった。

I層は現在の耕作土である。厚さが15cm程あり浅間Bテフラ(As-B)を確認できる。II層は厚さが5~10cm程あり、浅間Bテフラ(As-B)を多量に含む。III層は褐色土で、白色軽石粒1mmを5%含む。東にむかうほど薄くなり基本土層4・5では確認できない。IV層は黄褐色土で、Hr-F Aブロックを顕著に含む。角閃石安山岩粒2~20mmを10%含む。基本土層1・2には確認できない。V層は、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-F A)の一次堆積層で、基本土層1にはほとんど確認できない。この層を鍵層として遺構の検出に努めた。VI層は黒褐色土で、厚さは10~18cm程あり、浅間Cテフラ(As-C)を密に混入する。VII層は、黒褐色土で、浅間Cテフラ(As-C)を含まない粘質土である。VIII層は、暗褐色で、シルトの粘質土である。



第4図 基本層序



第5図 調査区全体図

V 検出された遺構と遺物

1 調査概要

菅谷中西遺跡は、幅6m全長69mの東西に狭長な調査地で、相馬ヶ原扇状地の扇端部付近に立地しており、北西から南東にかけて緩やかに傾斜している。

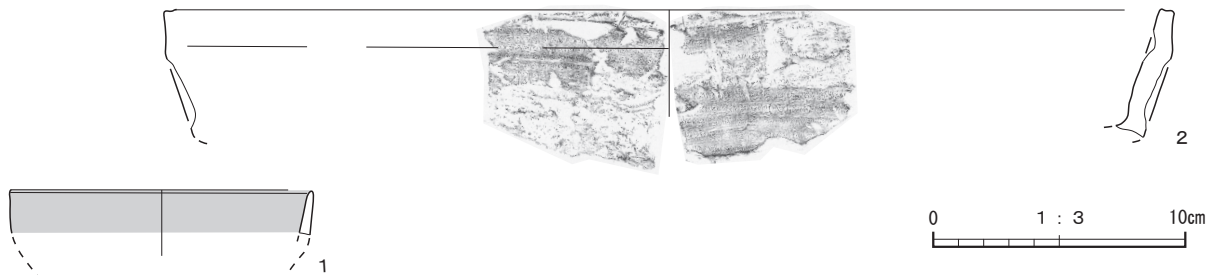
発掘調査により、調査区の東端に北西から南東へ走る埋没谷が存在していることがわかった。榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-F A)で覆われていて、1m以上の比高差が確認できた。のちの土石流等でほぼ平坦になっているが、周辺の地表面を注意深く観察してみると凹凸が確認でき、北西から南東に敷設されている現在の水路と谷方向が一致する。また、Hr-F A直下から調査区の中央付近に溝状のものを検出した。掘りくぼめた様相がみられないことから自然の流路と判断した。土師器甕の破片もまとまった状態で出土しているが、その下を掘りこんだ様相がみられないことから自然の流れ込みと考えられる。

検出・出土した遺構・遺物を概観すると、6世紀初頭の榛名山二ツ岳が噴火した時の火山噴出物であるHr-F A上面から検出した溝跡3条、土坑2基、ピット4基である。遺物は少ない。

2 溝跡

1号溝跡

本溝は調査区の東寄りに位置する。他遺構との重複関係は4号溝、2号土坑と重複する。新旧関係は、本溝は4号溝より新しく2号土坑より古い。残存状況は比較的良好であるが両端が調査区外へ延びるため詳細は不明である。平面形態はL字状を呈し、北壁付近で屈曲して西へ延びる。断面は逆台形状を呈する。規模は調査区内の全長が南北で5.10m、確認面での上幅が推定で2.41m、底面幅は1.35m、深度0.60mを測る。底面はほぼ平坦で北から南への緩やかな傾斜がみられる。埋没状況は断面でレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没である。遺物は中世の軟質陶器、天目茶碗、土師器片等が出土しており、2点を掲載した。本溝の時期は埋没土と遺物から16世紀代と考えられる。



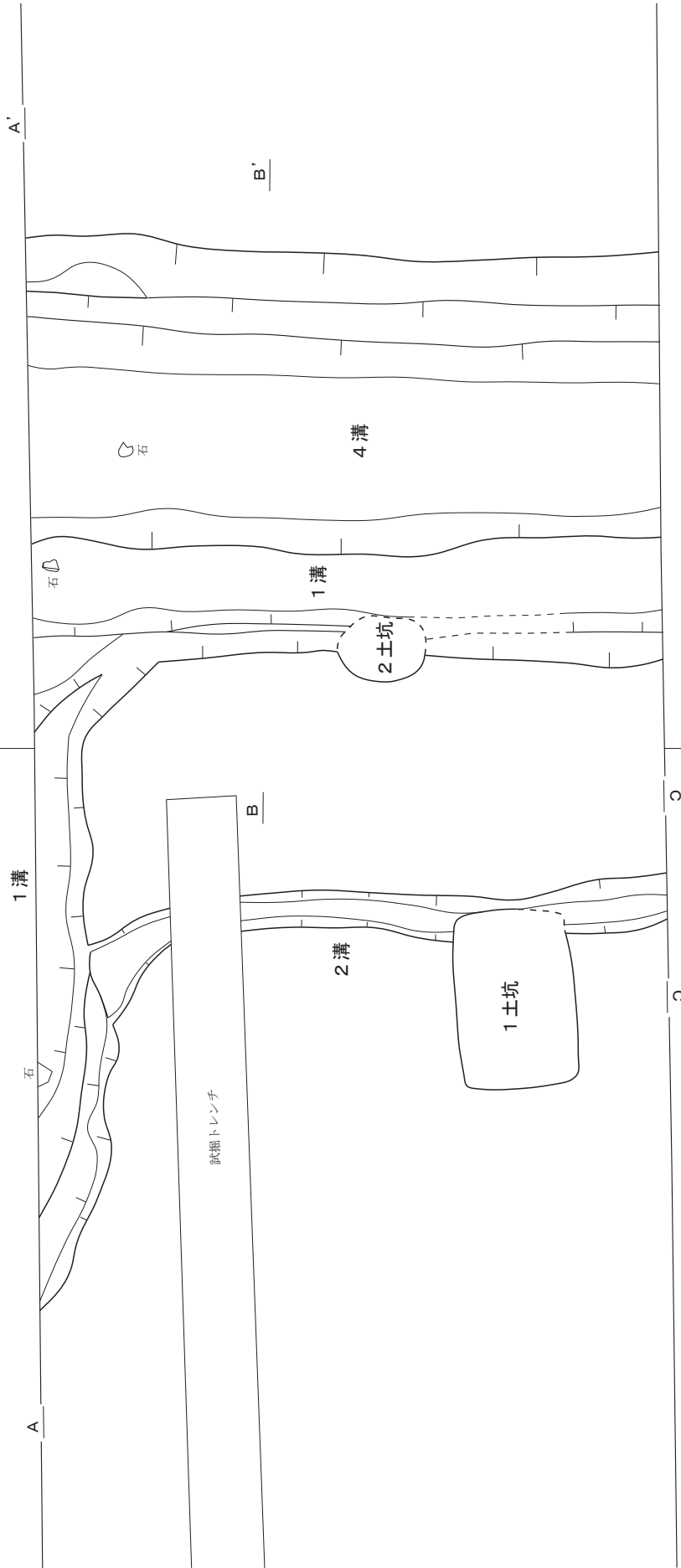
第6図 遺物実測図(1)

第1表 遺物観察表(1) 法量は①口径②底径③最大径④器高を表し、単位はcmである。また()は現存値、[]は推定値を表す。

番号	出土遺構 出土位置	器種	法量	①胎土②焼成 ③色調④残存	器形の特長、成・整形方法等	備考
1	1号溝 覆土	施釉陶器 天目茶碗	① [12.0] ④ (1.8)	①細粒②良好 ③黒褐④口縁部片	ロクロ整形。	
2	1号溝 覆土	軟質陶器 ほうろく	① [40.0] ④ (5.0)	①中粒②不良③にぶい ④口縁～底部片	胎土に赤褐色粗粒粒子含む。紐作り後ロクロ整形。器面は燻しにより黒色を呈する。	

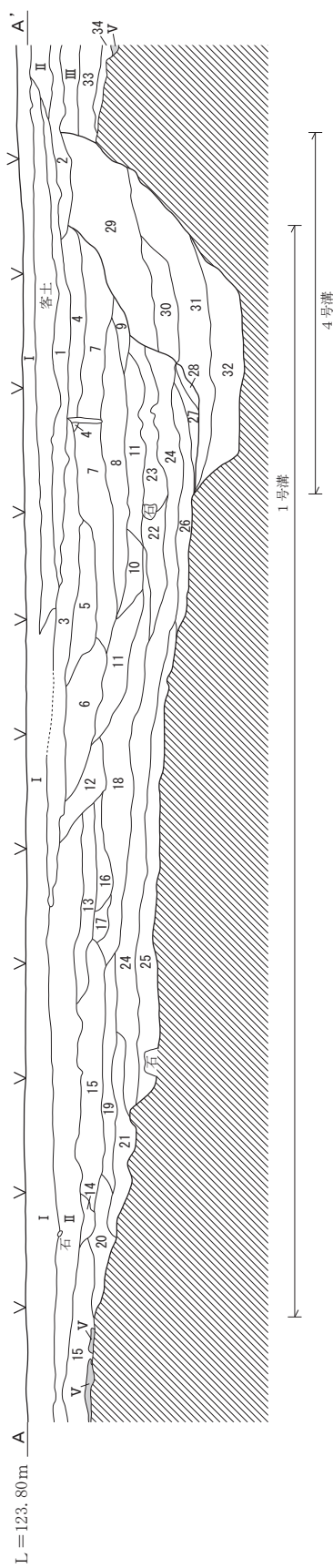
胎土は細粒(0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm)、粗粒(2mm以上)とした。焼成は、良好、不良の2段階とした。

Y-73780



M2550

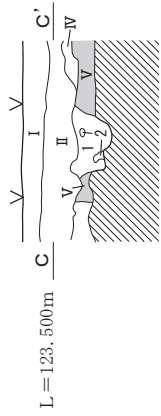
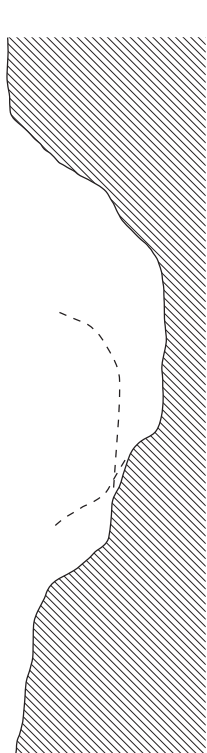
第7図 1・2・4号溝跡遺構図(1)



1・4号溝 (A-A')

- 1 暗褐色土 粘性ややあり 締まりあり 白色軽石 φ 1mmを5%含み、As-Bを僅か含む。
- 2 褐色土 粘性ややあり 締まりあり 白色軽石 φ 1mmを2%含み、As-Bを僅か含む。
- 3 暗褐色土 粘性あり 締まりあり As-Bを僅か含む。
- 4 褐色土 粘性あり 締まりややあり As-Bを僅か含む。
- 5 暗褐色土 粘性ややあり 締まりあり 白色軽石 φ 2mmを3%含み、As-Bを含む。
- 6 暗褐色土 粘性なし 締まりあり 白色軽石 φ 1mmを2%含み、As-Bを僅か含む。
- 7 暗褐色土 粘性ややあり 締まりあり 白色軽石 φ 1mmを3%含み、As-Bを含む。
- 8 暗褐色土 粘性なし 締まりあり 白色軽石 φ 1mmを5%含み、As-Bを少量含む。
- 9 暗褐色土 粘性なし 締まりあり 白色軽石 φ 1mmを7%含み、As-Bを少量含む。
- 10 暗褐色土 粘性なし 締まりあり As-Bを含む。
- 11 暗褐色土 粘性ややあり 締まりあり 白色軽石 φ 1mmを3%含み、As-Bを少量含む。
- 12 暗褐色土 粘性ややあり 締まりあり 白色軽石 φ 1mmを2%含み、As-Bを僅か含む。
- 13 暗褐色土 粘性ややあり 締まりあり 白色軽石 φ 1mmを2%含み、As-Bを僅か含む。
- 14 暗褐色土 粘性ややあり 締まりあり 白色軽石 φ 1mmを3%含み、As-Bを少量含む。
- 15 褐色土 粘性なし 締まりややあり FAブロック φ 10~20mmを10%含み、As-Bを含む。
- 16 暗褐色土 粘性あり 締まりあり 白色軽石 φ 1mmを2%含み、As-Bを少量含む。
- 17 暗褐色土 粘性なし 締まりあり As-Bを少量含む。
- 18 褐色土 粘性ややあり 締まりあり As-Bを少量含む。
- 19 暗褐色土 粘性ややあり 締まりあり 白色軽石 φ 1mmを2%含み、As-Bを僅か含む。
- 20 暗褐色土 粘性なし 締まりあり 白色軽石 φ 1mmを2%含み、As-Bを僅か含む。
- 21 褐色土 粘性なし 締まりあり FAブロック φ 10~20mmを20%含む。
- 22 暗褐色土 粘性ややあり 締まりあり 白色軽石 φ 1~3mmを15%含む。
- 23 褐色土 粘性なし 締まりあり 白色軽石 φ 1~2mmを2%含み、As-Bを僅か含む。
- 24 暗褐色土 粘性ややあり 締まりややあり As-Bが主体。
- 25 暗褐色土 粘性あり 締まりあり As-Bを少量に含む。
- 26 暗褐色土 粘性ややあり 締まりややあり As-Bが主体。
- 27 褐色土 粘性あり 締まりあり 粘質土。
- 28 黒褐色土 粘性なし 締まりややあり 砂質土。
- 29 褐色土 粘性あり 締まりあり 白色軽石 φ 1~2mmを2%含む。
- 30 褐色土 粘性あり 締まりあり 白色軽石を含まない。
- 31 褐色土 粘性あり 締まりあり 白色軽石 φ 1mmを2%含む。
- 32 褐色土 粘性あり 締まりあり 粘性土。
- 33 黄褐色土 粘性なし 締まりあり 白色軽石 φ 1mmを2%含む砂質土。
- 34 黄褐色土 粘性ややあり 締まりあり 白色軽石 φ 2~5mmを5%含む。

B L = 123.300m



- 2号溝 (C-C')
- 1 褐色土 粘性ややあり 締まりややあり φ 1~3mmの白色軽石 (FP) を2%、φ 5mmの暗褐色粘質土を3%含み、下位にはFAが混入する。
 - 2 VIII層の粘質土ブロック。

第8図 1・2・4号溝跡遺構図(2)

2号溝跡

本溝は調査区の東寄りに位置する。他遺構との重複関係は1号溝、1号土坑と重複する。新旧関係は、本溝は1号溝、1号土坑より古い。残存状況は良好であるが、両端が調査区外へ延びるため詳細は不明である。断面形態はU字状を呈する。規模は調査区内の全長が5.63m、確認面での上幅が0.33～0.60m、底面幅は0.14～0.50m、深度0.25mを測る。北から南への緩やかな傾斜がみられる。埋没状況は短期間に同一の土砂により埋没した様相がうかがえる。遺物は出土していない。本溝の時期は、埋没土と遺構の切り合いから古墳時代後期より新しい。

3号溝跡 欠番

4号溝跡

本溝は調査区の東寄りに位置する。他遺構との重複関係は1号溝と重複する。新旧関係は本溝が古い。残存状況は良好であるが、両端が調査区外へ延びるため詳細は不明である。断面は逆台形状を呈する箱堀である。規模は調査区内の全長が5.97m、確認できた上幅が3.14m、底面幅は1.40m、深度1.58mを測る。底面はほぼ平坦で北から南への緩やかな傾斜がみられる。埋没状況は断面でレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没である。遺物は須恵器の小片が出土している。本溝の時期は埋没土と遺構の切り合いから中世であろう。

3 土坑

1号土坑

本土坑は調査区の東寄りに位置する。他遺構との重複関係は2号溝と重複する。新旧関係は本土坑が新しい。残存状況は比較的良好である。形態は平面が隅丸長方形を呈し、断面は箱形を呈する。規模は長軸が1.70m、短軸が1.13m、深度0.21～0.28mを測る。底面は側面から中心へ向かって緩やかな傾斜がみられる。底面付近から小石を数多く含む暗褐色の土塊が出土した。土塊は粘性がなく硬い。小石は、大きさが2.0～5.5cmほどで、角閃石安山岩を含む河原石で79点を数える。埋没状況は自然埋没である。遺物は須恵器、陶器、緑泥片岩が出土しているが、いずれも小片である。本土坑の時期は埋没土と遺物から中世と考えられる。

2号土坑

本土坑は調査区の東寄りに位置する。他遺構との重複関係は1号溝と重複する。新旧関係は本土坑が新しい。残存状況は不良である。平面形態は楕円形を呈し、断面は皿状を呈する。規模は長径が推定で0.82m、短径が推定で0.64m、深度0.40mを測る。底面は一定ではない。埋没状況は自然埋没であろう。遺物は土師器、磁器が出土しているが、いずれも小片である。本土坑の時期は不明である。

4 ピット

1号ピット

本ピットは調査区の中央東寄りに位置する。他遺構との重複はない。残存状況は比較的良好である。形態は平面が楕円形を呈し、断面は箱形を呈する。規模は長径が0.60m、短径が0.51m、深度0.48mを測る。底

面は平坦で、埋没状況は自然埋没である。遺物は陶器小片が出土している。本ピットの時期は不明である。

2号ピット

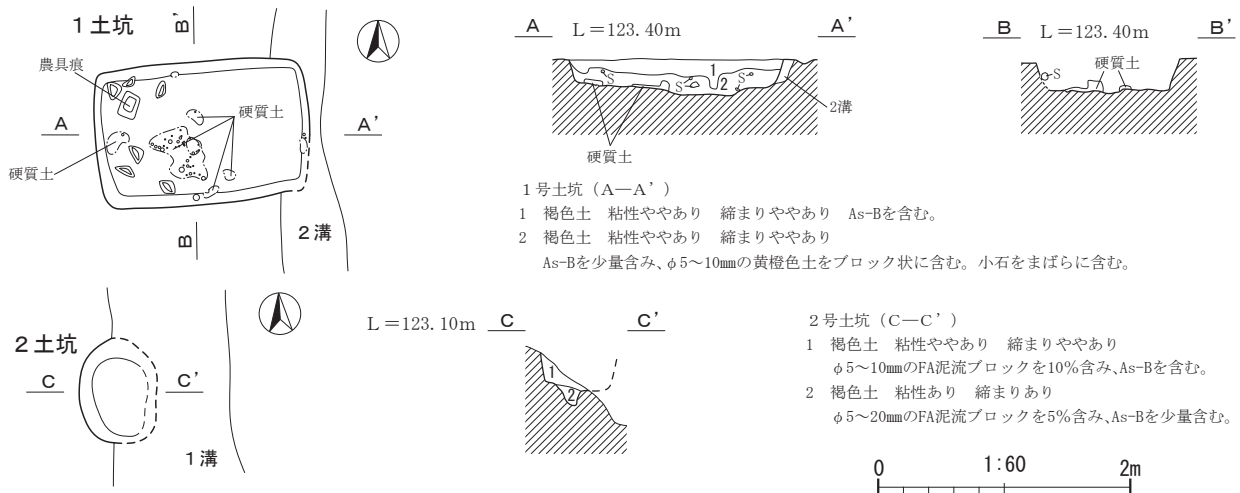
本ピットは調査区の中央東寄りに位置する。他遺構との重複はない。残存状況は比較的良好である。形態は平面が楕円形を呈し、断面はU字状を呈する。規模は長径が0.38m、短径が0.31m、深度0.34mを測る。埋没状況は自然埋没であろう。遺物は出土していない。本ピットの時期は不明である。

3号ピット

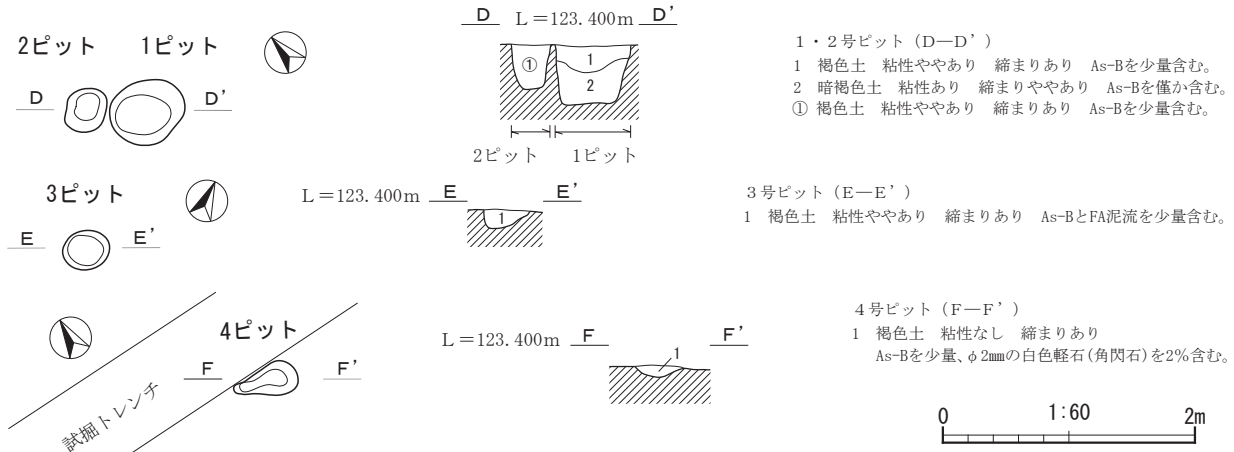
本ピットは調査区の中央付近に位置する。他遺構との重複はない。残存状況はあまり良好ではない。形態は平面が楕円形を呈し、断面は皿状を呈する。規模は長径が0.37m、短径が0.31m、深度0.15mを測る。埋没状況は自然埋没であろう。遺物は出土していない。本ピットの時期は不明である。

4号ピット

本ピットは調査区の中央東寄りに位置する。他遺構との重複はない。残存状況はあまり良好ではない。形態は平面が楕円形を呈し、断面は皿状を呈する。規模は長径が0.51m、短径が0.26m、深度0.09mを測る。埋没状況は自然埋没であろう。遺物は出土していない。本ピットの時期は不明である。



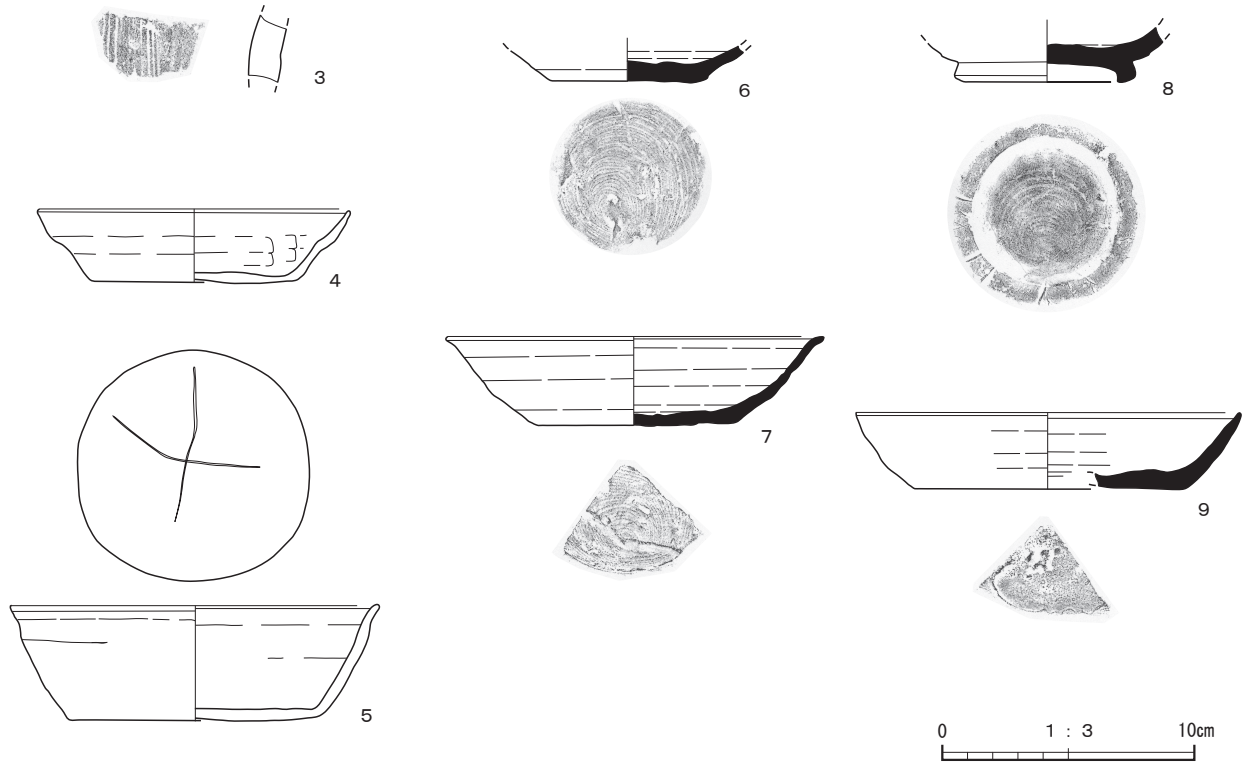
第9図 1・2号土坑遺構図



第10図 1~4号ピット遺構図

5 遺構外の遺物

埋没谷から縄文土器1点と土師器・須恵器が出土し、7点を掲載した。また、Hr-F A直下から土師器甕の小片が出土している。



第11図 遺物実測図(2)

第2表 遺物観察表(2) 法量は①口径②底径③最大径④器高を表し、単位はcmである。また()は現存値、[]は推定値を表す。

番号	出土遺構 出土位置	器種	法量	①胎土②焼成 ③色調④残存	器形の特長、成・整形方法等	備考
3	埋没谷 覆土	縄文土器 深鉢	④(2.3)	①中粒②良好 ③浅黄橙④破片	条線を施す。	
4	埋没谷 覆土	土師器 坏	①[12.4]②8.0 ④2.9	①細粒②良好③にぶい 橙④口縁～底部1/3残	平底。口縁部は先端部でわずかに内湾する。 口縁部横ナデ。底部へラ削り。	
5	埋没谷 覆土	土師器 坏	①[14.6] ②[10.0]④4.6	①細粒②良好③にぶい 橙④口縁～底部3/5残	平底。口縁部は直線的に外傾する。 口縁部横ナデ。底部へラ削り。	内面 線刻
6	埋没谷 覆土	須恵器 坏	②6.0 ④(1.2)	①中粒②良好 ③灰白④底部片	胎土に2mmの小石を含む。ロクロ整形。回転糸切り。	
7	埋没谷 覆土	須恵器 坏	①[15.0] ②[8.0]④3.5	①細粒②良好 ③灰白④口縁～底部片	ロクロ整形。回転糸切り。内外面の一部は焼きにより 黒色を呈する。	
8	埋没谷 覆土	須恵器 高台付埴	②7.0 ④(1.6)	①細粒②良好 ③褐灰④底部片	ロクロ整形。回転糸切り。高台貼付。	
9	埋没谷 覆土	須恵器 坏	①[15.2] ②[10.6]④3.1	①細粒②良好 ③褐灰④口縁～底部片	ロクロ整形。底部にタール・小石が付着し切り離し不 明。	

胎土は細粒(0.9mm以下)、中粒(1.0～1.9mm)、粗粒(2mm以上)とした。焼成は、良好、不良の2段階とした。

VI ま と め

今回の調査で検出された遺構にL字に屈曲する1号溝跡がある。調査区が狭いため詳細は不明ではあるが、埋没土にAs-B軽石が確認でき、天目茶碗や軟質陶器等が出土していることから、その時期は16世紀代と考えられる。また、1号溝跡に切られる遺構に4号溝跡がある。この溝は、埋没土内におけるAs-Bの混入は明確ではないが、1号溝跡と主軸方向が同一である。1号溝跡に切られる2号溝跡は、Hr-F Aより新しい溝跡で、埋没土は洪水堆積層である。

土坑は2基検出している。いずれも埋没土にAs-Bを含み、隅丸長方形を呈する1号土坑は底面の一部に硬質の土を配し、小石を混入させている。2号土坑は残存状況が不良で、詳細は不明である。

ピットは4基検出し、埋没土にAs-Bが確認できた。

本遺跡から400m南東の菅谷町字堀の内に主郭を配する菅谷城がある。箕輪長野氏関係の城と考えられている。長野氏は在原業平を祖とする在地武士で、長野郷（高崎市浜川町付近）を本拠として勢力を拡大し、多くの城館址を残している。箕輪城、鷹留城、浜川館、乙業館、寺ノ内館、矢島砦、北爪の砦などがあり、他にも高田屋敷、長町屋敷、与平屋敷、上屋敷、中屋敷、下屋敷などの屋敷があったと言い伝えられている。長野氏ゆかりの寺院には、高崎市浜川町の来迎寺、下室田町の長年寺、箕郷町東明屋の石上寺、箕郷町富岡の長純寺がある。

菅谷城は、中世末に環濠屋敷を連結した平城で、東西370m、南北はそれ以上の距離を有する輪郭式縄張りが見込まれている。本遺跡で検出された1号溝跡は、埋没土と出土遺物から、菅谷城に関連する溝跡の可能性が高い。他に周辺遺跡の発掘成果として菅谷石塚遺跡で菅谷城址大外郭の位置に相当する6区3号溝跡が検出されている。報文によれば、その形態は断面が緩い傾斜を持つ逆台形形状を呈し、規模は幅3m以上、深さ1m前後、溝の走向はほぼ南北方向で、埋没状態は土層断面観察から自然埋没の様相がうかがえると記してある。また、菅谷村東遺跡のVI区から、この時期に比定される東西方向に走向する2号溝跡が検出されている。

参考文献

- 群馬町誌編纂委員会 1998 『群馬町誌 資料編1 原始古代中世』 群馬町
高崎市市史編さん委員会 2003 『新編 高崎市史 通史編1 原始古代』 高崎市
高崎市市史編さん委員会 1996 『新編 高崎市史 資料編3 中世I』 高崎市
堤ヶ岡村誌編纂委員会 1956 『堤ヶ岡村誌』
群馬町教育委員会 1980 『菅谷遺跡発掘調査報告』 群馬町埋蔵文化財調査報告書 第2集
群馬町教育委員会 1986 『群馬町の遺跡—分布調査からみた地域のうつりかわり—』
群馬町教育委員会 1987 『推定東山道—群馬町中泉・福島・菅谷地区を中心とする遺構確認調査報告—』
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)』 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第12集
群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 『菅谷石塚遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第313集
高崎市教育委員会 1979 『正観寺遺跡群(Ⅰ)』 高崎市文化財調査報告書第11集
高崎市教育委員会 1980 『正観寺遺跡群(Ⅱ)』 高崎市文化財調査報告書第14集
高崎市教育委員会 1981 『正観寺遺跡群(Ⅲ)』 高崎市文化財調査報告書第21集
高崎市教育委員会 1982 『正観寺遺跡群(Ⅳ)』 高崎市文化財調査報告書第36集
高崎市教育委員会 2007 『菅谷万年貝戸遺跡』 高崎市文化財調査報告書第216集
高崎市教育委員会 2011 『菅谷・村東遺跡』 高崎市文化財調査報告書第286集
高崎市教育委員会 2015 『菅谷遺跡群1』 高崎市文化財調査報告書第348集



『群馬町の遺跡』群馬町教育委員会 1986
第6図 菅谷城址平面図を一部改変

0 1:5,000 200m

第12図 菅谷城址平面図

写真図版



調査区遠景(南東から)



調査区全景(上が北)



調査区遠景(東から)



調査区東側全景(上が北)



調査前全景(東から)



作業風景



基本土層-1



基本土層-2



基本土層-3



基本土層-4



1・4号溝跡全景(南から)



1号溝跡西側全景(東から)



2号溝跡全景(南から)



1号土坑全景(南から)



1号土坑 小石・硬質土検出状況(北から)



2号土坑全景(南から)



1・2号ピット全景(南西から)



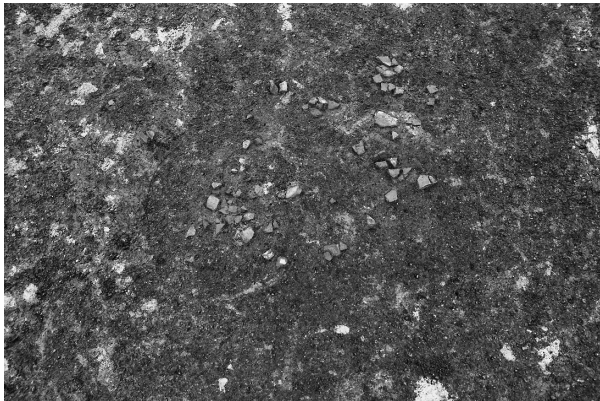
3号ピット全景(西から)



4号ピット全景(南西から)



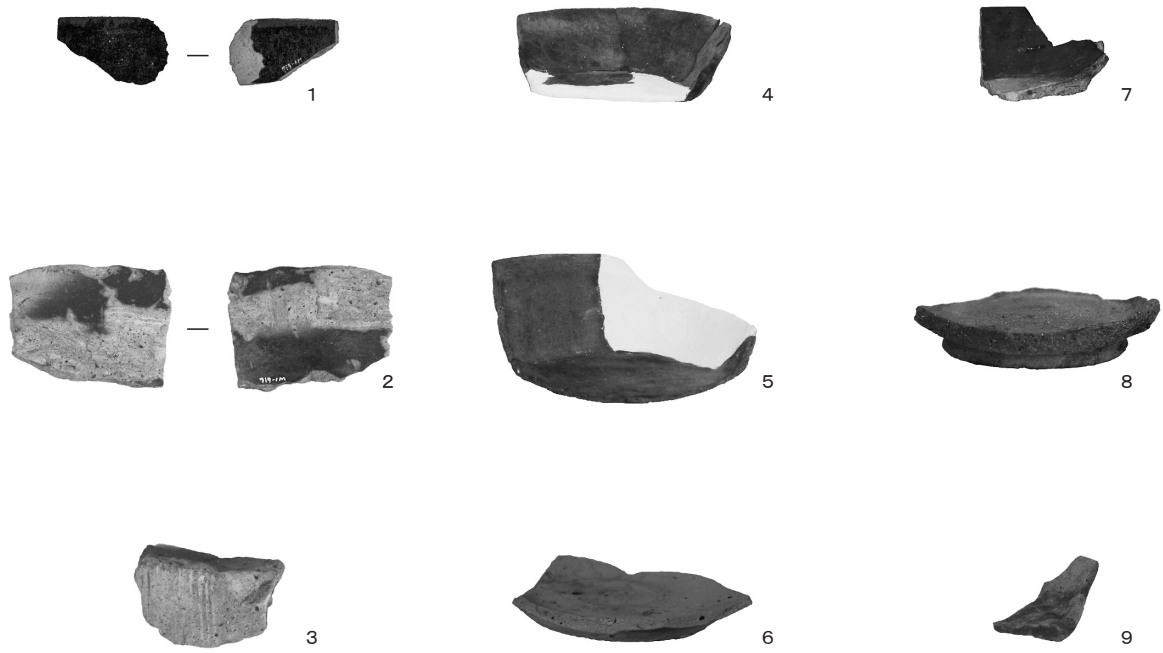
埋没谷全景(南から)



Hr-FA下遺物出土状況(北から)



Hr-FA下自然の流路(東から)



出土遺物

抄 録

フリガナ	スガヤナカニシイセキ
書名	菅谷中西遺跡
副書名	住宅造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第406集
編著者名	板垣 宏
編集機関	スナガ環境測設株式会社
発行機関	高崎市教育委員会 〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1
発行年月日	西暦2018年3月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
スガヤナカニシイセキ 菅谷中西遺跡	群馬県高崎市 菅谷町字中西 1280-1外	102020	719	36°22' 51"	139°00' 39"	20171111 } 20171226	433㎡	住宅造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
菅谷中西遺跡		中世	溝跡 土坑 ピット	天目茶碗 軟質陶器	菅谷城堀跡

高崎市文化財調査報告書 第406集

菅 谷 中 西 遺 跡

住宅造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018年3月20日 印刷

2018年3月30日 発行

発行 高崎市教育委員会
〒370-8501 高崎市高松町35番地1
TEL 027-321-1291

編集 スナガ環境測設株式会社
前橋市青柳町211-1

印刷 朝日印刷工業株式会社

